


博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員 (主査) 新谷 忠彦 

本論文は、タイ語を母国語とする外国人が、日本語を勉強する際に使い分けに苦労する終助詞「よ」・「ね」・「よね」の機能を明らかにしようとした研究である。この三つの終助詞はタイ語に翻訳しようとするれば何れも na としか訳せず、同じものになってしまい、タイ人にとっては使い分けが難しい。しかし、同時にその使い方を誤れば日本人との会話にかなり大きな障害を来す終助詞でもある。従って、タイにおける日本語教育においては、他の終助詞に比べてこの三つの終助詞が格段に重要性が高いと言える。一方で、現在タイで使われている日本語教科書では、この三つの終助詞の機能が明確に説明されておらず、明確な機能の分析はタイにおける日本語教育に大きく貢献できる。こうした点で本論文の主旨は十分に評価できる。

著者は先行研究を7つのグループに分け、それぞれの概要と批判は付録の中で述べているが、そうした先行研究の中から最も妥当性が高いと考えられる陳の説を第二章で取り上げ、その要旨と問題点について述べている。著者が集めた大部分の用例は陳の定義に従って説明することが可能であり、この点で陳説の妥当性は極めて高いといえる。しかし、陳が気付かなかった次のような用法も存在する。

例：(レストランの料理がまずいとき、AがBに向かって)「おいしいね」

この例は意義素通りの用例ではなく、その意義素を逆手にとって「あなたはよくもこんなにもまずいものをおいしいと思って食べられますね」というような皮肉を表明している用例であり、陳の定義では説明できない用法である。また、非常に個別的な理由によるものや、固定化・慣用化されたもの、例えば「何が～よ」、「[擬似疑問詞]～の(んだ)よ」、「～かよ」、「～かね」、「どうせ～よ」、「よく～ね」なども陳が触れていない用法である。著者はこれらを特殊な用法として扱い、陳説をふまえながらそれを補強する方向で本論文を展開している。

第三章では「よ」について、第四章では「ね」・「よね」について、主にシナリオ『ひらり』の用例を中心に、この三つの終助詞の用法の分析を行なっている。「ね」と「よね」については、その用法に関して重なった部分が多く、同じ章で扱われているが、置き換えが可能か不可能かを用例の中で検討することによって、この二つの終助詞の共通点と相違点を明らかにしている。また、日本語教育の視点から、どのようにこれらの終助詞の用法を指導すべきかについても検討されている。

本論文を評価する意見として次のような点が上げられた。

(1) 陳が気付いていなかった特殊な用法に気付いている。

(2) 日本語教育の視点が入り入れられており、今後タイにおける日本語教育の分野で大きく貢献できる。

一方で次のような批判点も審査委員の間から指摘された。

(1) 先行研究に対する理解が必ずしも十分ではないのではないか、とみられる箇所が一部に見られる。

(2) 著者の例文はその殆どがシナリオから取り上げたものであるが、実際の会話とシナリオではかなりの違いがあり、シナリオでは実際の会話以上に終助詞が使われる傾向があるが、そうした違いの考察がなされていない。

(3) イントネーションが取り上げられていないが、終助詞の研究に際し、イントネーションの問題は避けて通れない。それなりの言及がなされて然るべきである。

(4) 用例の解釈に一部不自然と思われるものが見られ、結果的にこじつけの感じを与えているものがある。

(5) 本論文のように、用例を意味によって分類すれば際限なく広がってしまう恐れがある。文の形式をも考慮に入れた分類も検討すべきである。

以上の論文に対する評価と批判、口述審査における応答内容を総合的に判断した結果、指摘された批判点を考慮しても尚、日本語教育の視点から終助詞を扱った論文として高く評価することができること。また、指摘された批判点は今後の努力によって克服することが可能であり、その能力も十分に備えているものと判定され、審査委員会としては、五人の審査委員全員一致で、ソイスター・ナラノン氏に博士号を授与することが適当であるとの判断に至った。